

～ 抄 録 ～

〔論 説〕

英語における動詞「震える」の多様性： その情動的要因の分析

高 木 道 信

小論は、第12回国際応用言語学会・世界大会（1999年）のシンポジウムで筆者が英語で発表した「類義語間に見られる強さの程度の差」及び、この中間報告後に刊行された『動詞の類義語の研究—日英語の比較の観点から—』（2000年）に論考の基盤を置いている。日本語の「震える」に相当する英語の類義語に関する情報を、人・体の部分・声のみに限定し、<SHAKE（震える）に類する動詞：Shake, Tremble, Quake, Quiver, Shiver, Shudder>の自動詞としての特性を比較した。一般辞典・類義語辞典の多くは、このセット内の類義語をshakeないしはtrembleを一般的な語として基本語・中核語に定め、この2語をベースにして解説している。一例をNODEから引用してみよう（先行研究には見られぬアプローチであるが、基本語を大文字で示してある。下線部は程度・様態を表す副詞を、波線部は「震え」の情動的要因を、イタリック体はセット内の類義語を、それぞれ示す）：

<“SHAKE = TREMBLE uncontrollably from a strong emotion such as fear or anger / TREMBLE = SHAKE involuntarily, typically as a result of anxiety, excitement, or frailty / quake = SHAKE or shudder with fear / quiver = TREMBLE with sudden strong emotion / shiver = SHAKE slightly and uncontrollably as a result of being cold, frightened, or excited / shudder = TREMBLE convulsively, typically as a result of fear or repugnance.” (NODE)>.

震えの要因は肉体的なものと同精神的・感情的なものに大別され、動詞が特定される傾向はあるが、喜怒哀楽の情と同随伴感情は複雑で例外が認められる事例もある。10人の英語母語話者を対象としたアンケートの集計結果と、大学英語教育学会（JACET）・語法研究会の共同研究者との意見交換から得た示唆も小論に反映させてある。

イエスと仏教

柴田 秀

いうまでもなく、イエスはキリスト教の教祖にほかならない。したがってキリスト教は、当然イエスの思想をそのまま受け継いできていると一般に思われている。ところが実は、そうではない。

私見によれば、伝統的西洋キリスト教は、主としてパウロのいわゆる十字架の神学を継承してきたのである。パウロの思想にはしかし、その十字架の神学と混在しつつ、西洋キリスト教によっては「神秘主義」として切り捨てられてきたもう一面の思想が含まれている。そしてそれこそ、むしろイエスの思想に近いもの、いや恐らくパウロがイエスから正しく受け継いだものなのだ。

この、「神秘主義」としてパウロに継承されたイエスの思想を念入りに探っていくと、われわれはそこに、たんにキリスト教のみならず、それとは一見まったく異質にみえる仏教思想をも包摂した真に普遍的な思想に逢着するのである。

かかる視点に立って本稿では、イエスの思想と仏教思想とを、その根本的一致点に標的を絞って解明してゆこうと思う。

leadとfollowの意味論

松本 理一郎

この論文では、leadとその反義語followの中核的意味とその比喩的な拡張について、辞書の例文を分析し、考察を加えた。いずれの動詞も、動作主と被動作主が通常義務的であり、また移動動詞であるゆえに、副詞類によって表される着点などを伴う点でも対称性を有している。しかしleaderには進路決定権があるのに対して、followerはそうでない点是非対称である。両動詞はそれぞれ経路が、動作主、被動作主の代りに用いられる事例があるが、これらは中核的な意味からの、接触を通じての換喩的拡張としてとらえられることを示した。また類似の意味変化として、名詞trail, (foot)stepの例をあげた。隠喩的拡張については、例えば、A 先行=優位、B 先導=支配、C 前後関係=因果関係、D 先導=指導などの隠喩に基づいて、両動詞でほぼ並行的な拡張が見られる。Aについては対応する意味変化としてraceの例をあげた。

生涯学習支援のための計算モデル

大矢野 潤

インターネットに代表されるコンピュータネットワークは一般家庭にまで急速に普及している。これまで独立に存在した社会基盤をインターネット上に再構築し、統合する傾向は、教育インフラを取り巻く環境にも同様のものをみることができる。本論文では、現在のe-Learningシステムの状況と問題点について考察する。さらに、生涯学習支援システムをインターネット上に構築するために、すでに一般的であるHTMLに変わる仕組みであるセマンティックWebとその意味論であるRDFモデル理論を採用した。そして、RDFモデルの述語を状態遷移システムとして解釈することにより時制論理の適応を可能にする。そして、単なる参照関係としてのWebリンクから、依存関係としてのリンクをつくることを考察し、さまざまな教育資源と他のサービスを組み合わせた「コース」を作り出すことを可能にした。さらに、自律分散的に存在するコースを統合し、効率よく管理・利用するための枠組みと理論を与えた。

How Task-Based Teaching Can Affect Motivation

ROBSON, Graham G.

Over the past few decades motivation has gained in importance for second language study. In Japan this is especially true to take advantage of interest in foreign culture and jobs using English, as English becomes the global language of business communication. This paper presents a number of practical steps teachers can follow to address motivation issues in the class, from developing a good rapport with students to building the idea of autonomy. However, the teacher creating the right environment by itself is not enough to completely deal with motivation, good teaching methodology is also important. One particular teaching ethos, Task-Based teaching is a powerful medium that provides students with opportunities to negotiate meaning and can increase motivation. This paper further compares how 6 different types of tasks can affect 3 important variables in motivation: autonomy, clear outcomes and appropriateness of challenge, and suggests the best type of task to build motivation.

ここ数年第2外国語を学ぼうとするモチベーションが高まっている。外国での生活、

英語を使っての仕事などを考えている学生が増えている。この論文の中では実際に生徒がやる気を出させる方法をご紹介します。先生方各自持っている指導方法は重要ですがタスクベース指導法は生徒たちのモチベーションを高めるのにとても適しています。この論文では6種類のタスクを使っての比較そしてどのような影響を受けたかを表しています。